

蘇芳集



涼し

高橋 さえ子

四万六千日

青山

丈

足利学校「アマビコ」の涼しき眸

禅林の風に吹かれて羽抜鶏

朝風に水尾をひらきて通し鴨

湯気の香も匂の名残りの豆御飯

髪染めて雷鳴り雲の下通る

祖父祖母の遠忌鳳仙花が弾け

薬石をこころに灯火親しめり

河は流れる四万六千日の

この人も四万六千日の顔

百日紅べつに見たいと思はぬ日

桃の皮大きく剥けて生身魂

奥行のない公園の蝸牛

帰りにもこちら見てゐる羽抜鶏

初蟬のいまきたやうに鳴き出せり

洋酒の香

清水裕子

海市

富田正吉

踏まれふまれて夏草となりゆけり
ざうざうと庭木音たつ更衣
空瓶に洋酒のかをり太宰の忌
大寺の青水無月の屋根の反り
住職に会へしことなく牡丹みる
墓原に出口をさがす芥子の昼
薄暑なる懐紙にのこる和菓子香

遠き日

下平直子

網戸

野路斉子

芍薬やをみな齢俄かななる
遠き日が匂ふ六月の抽斗
田をわたる風芳しき更衣
瓜揉んで東京遠くなるばかり
母と思ふ香水の香と擦れちがふ
ふつくらと豆煮えてきし夏至の雨
路地に画く石蹴りの輪・輪夕立あと

明易や夢のかたちになりし母
海市より届く手紙と思ふかな
気の遠くなるまで薔薇を見ては駄目
にこにこと食べてをらるる柏餅
黄菖蒲の前でうとうとしてよい
菖蒲園出て老人の貌となる
時の日の樹下に雀の照り翳り

森がよく見える網戸を入れしより
直立不動何処から見ても枇杷新樹
子鴉のモンローウオーク急げずに
沈んでは浮かんで森の剪定夫
万緑の森の何処かに道具小屋
いなびかり三角屋根と云へば赤
少しづつ秋となりゆく少しづつ

暝れば

前田陶代子

暝れば母ゐて菖蒲濃むらさき
沼面打つ雨あらあらと梅は実に
雨あとの日のきびきびと繭盛り
昼顔のいろと吹かれてゐて眠し
まつ白な珈琲カップ桜桃忌
踏む草に潮の匂ひや夏負けて
のうぜんかづら夕風を持て余し

たはむれに

宮尾直美

新茶淹れかへて師のこと父のこと
師思ふと六月高き波がしら
たはむれの草笛ふいに鳴ることも
梅雨の夜や俳書の棚に酔の匂ひ
蜘蛛の囀のレースの風や星生まる
平らかに風の通ひぬ蓮の花
若さとは歩幅の広さ夏帽子

水無月

八木下末黒

竹皮をぬぐや節々青びかり
泰山木咲く卒寿の人になかな
やうやうの梅雨なつかしや家籠
水無月や青のきはまる沼の道
台風の爪痕の地の枇杷とどく
遠くなる父と弟枇杷そなふ
鉄塔の前に立ちたる立葵

使ひ川

吉田幸敏

六月来運座なき日をうちかさね
隠れ棲むことのはじめの菊を挿す
かにかくに命毛だいじ山瀬風来る
次の世へ箱庭もまた新しく
代田水いつとはなしに星の出で
浮苗を挿すや手足のけものめき
使ひ川ざぶと芒種の手足かな